

1227 第4代執権北条経時の弟として生誕

1246～56 病弱で倒れた兄経時に代わって第5代執権となる。(20歳)

1247年執権に就任した直後、北条の執権体制に反発する鎌倉幕府第4代将軍・藤原頼経(よりつね)を京都に強制送還して反対派を一掃した事で、不満をつのらせた三浦泰村(やすむら)の一族を滅ぼすというゴタゴタ劇がありましたが、時頼が執権となっていた11年間で、いわゆるモメ事となったのは、この三浦の一件だけで、これまで、発足以来ドタバタ続きだった鎌倉の世を、うまく治めた人物として評価されてる。

モメ事が無いという事は、それだけ執権という地位を揺るぎない物にしたわけで、そのぶん独裁的な一面もあり、特に、第5代将軍・藤原頼嗣(よりつぐ)を追放して後嵯峨天皇の皇子である宗尊(むねたか)親王を第6代の将軍に据えてからは、まさに北条執権の独壇場となった事は確かだ。

ただ、その一方では、御家人に対しても数々の融和政策を採用したり、庶民に対しての救済政策を行って積極的に庶民を保護した事などを見れば、やはり時頼=名君と言えるのではないだろうか？

この庶民救済も、もともと北条氏がそれほど身分の高い家柄では無いので、血統で統治をする上から目線の政治には限りがあり、庶民を優遇する善政を敷く事で、自らの立ち位置も確保しようとした・・・と言ってしまえば、その通りだが、とにかく、それまでは弱肉強食世界で、強い者が弱い者を押さえつけ、言わば「斬り捨て御免」がまかり通っていたわけで、上からの略奪や不法行為にも、庶民は泣き寝入りするしかなかった時代だったのであるから、そこを、庶民の側に立った政策を自ら行い、それを配下の武士たちにも推し進めた・・・

武士たるもの、民衆から搾取を繰り返して押さえつけるのではなく、民衆とともに生き、ともに豊かになっていくものであるという観念を時頼は、配下の武士たちに植えつけようとしたのです。

これまで政治を行って来た貴族に代わって、初めての武士政権である鎌倉幕府。民衆を擁護するという形で、その政権を揺るぎない物にしていこう・・・

この時頼の政策は、民衆を撫でるように=「撫民(ぶみん)政策」と呼ばれる。

これは、日本の歴史上、大いなる転換で、古代より受け継がれて来た秩序の大変革・・・時頼は、もっと注目されても良い政治家ではないかと思う。

1256 病に倒れたのを機会に、第6代執権を義兄である北条長時に譲り、最明寺入道と号した(30歳)。しかし実際には、幼少の実子(後の8代執権時宗)が成長するまでの間は実際の政治は時頼主導で取り仕切られていたとの見方が多数。

1257～西明寺入道と称して諸国を漫遊したという。正嘉年間は1257～1259の3年間だけ。

1263 広長3年 病の為、最明寺で没。享年37歳(満36歳)

○曹洞宗の開祖道元禅師と時頼について

宝治元 1247 年八月の道元の鎌倉行きについては、同年六月の宝治合戦が関係することは言うまでもないですが、この合戦の以前、執権北条時頼が戦乱回避のため、ほとんど捨て身で努力していたことが「吾妻鏡」に記されている。

にもかかわらず、合戦は勃発し、戦死者 500 人以上という結末を。つまり、道元が訪れた宝治元年八月の鎌倉は、武家の都である以前に、戦災都市であったのであります。弘法救生を自己の使命としていた道元が鎌倉に駆けつけたことは、彼の思想と何ら矛盾しない。

そして、当時の鎌倉にあって、もっとも救済を求めていたのは、努力もむなしく自身の命令という形で三浦氏を滅ぼしてしまった時頼であったのではないだろうか。道元の鎌倉行きは、「関東執権従五位上行左近将監平朝臣」という権力者に接近するためではなく、「北条五郎（時頼）」という二十一歳の青年を救うためであったと思う。

七ヶ月の滞在の後、「名藍を建てますから、帰らないで下さい」と言う時頼に対し、「越州の小院にも檀那あり」の言葉を残し、道元は永平寺へと去る。。この時の道元との出会いが、時頼の禅宗への傾倒の端緒であったのではないだろうか。

○日蓮宗の宗祖日蓮と北条時頼について

1253 より 1271 までの 18 年間鎌倉の松葉ヶ谷草庵（後に法華堂と号する）が布教活動のための起居の場所となる。

文応元年 1260 年 7 月 16 日「立正安国論」前執権の時頼に提出している。日蓮は、『立正安国論』の中で、相次ぐ災害の原因は人々が正法である法華経を信じずに浄土宗などの邪法を信じていることにあるとして諸宗を非難し、法華経以外にも鎮護国家の聖典とされた金光明最勝王経なども引用しながら、このまま浄土宗などを放置すれば国内では内乱が起り外国からは侵略を受けると唱え、逆に正法である法華経を中心とすれば（「立正」）国家も国民も安泰となる（「安国」）と説いた。

この内容はたちまち内外に伝わり、その内容に激昂した浄土宗の宗徒による日蓮襲撃事件を招いた上に、禅宗を信じていた時頼からも「政治批判」と見なされて、翌年には日蓮が伊豆国に流罪となった。

時頼没後の文永 5 年（1268 年）にはモンゴル帝国から臣従を要求する国書が届けられて元寇に至り、国内では時頼の遺児である執権北条時宗が異母兄時輔を殺害し、朝廷では後深草上皇と龜山天皇が対立の様相を見せ始めるなど、内乱の兆しを思わせる事件が発生した。その後弘安元年（1278 年）に改訂を行い（「広本」）、さらに 2 回『立正安国論』を提出し、合わせて生涯に 3 回の「国家諫暁」（弾圧や迫害を恐れず権力者に対して率直に意見すること）を行うことになる。

○浄土真宗の祖親鸞聖人（1173～1262 没 90 歳）と時頼について

親鸞聖人が六十歳をすぎた頃のことです。聖人は鎌倉の北条時頼の下で一切経（仏教の全経典をはじめとして仏教関係の論文・注釈書などを集大成したもの）を書写したものの校正を手伝うこととなりました。世間では名が知られていなかった聖人は、このようなアルバイトをしながら暮らしていたのでしょう。

一切経書写・校合もいよいよ終りに近づいたある日、他の僧とともに執権主催の宴席に招じ

られました。宴席には副将軍をはじめ、明応院別当なども加わり、魚類やお酒などもあり日頃口にしないも種々の珍物によりもてなされました。

明応院別当が聖人に近づくと小声で話しかけてきました。「善信殿、漁や酒を頂く時は、このように袈裟を外して食することが礼儀。それが戒を破る者のせめてもの勤め。食べられる魚や鳥への哀れみともなります。魚も坊さんに食べられては浮かばれません」。

聖人「……」

親鸞はふと、耳の底に止まっていた母から聞いた物語が一瞬、脳裏をかすめた。それは母より聞いてより今まで思い出したこともなかった釈尊ご幼少の頃の逸話であった。

母「お釈迦様が、まだお小さい頃のことです。庭園を歩いていると、トンボが飛んでいる光景にお出会いになりました。するとそのトンボを、陰に隠れていたカエルが飛び上がって食べてしまったそうです。カエルが満足していると、するすると近寄ってきたヘビが、そのカエルをひとの飲み。すると今度は空を舞っていた鷲がそのヘビをついばみ大空へ舞い上がっていきましました。そのご様子を見たお釈迦様は、悲しい顔をなさいました。このときの体験が、お釈迦様がご出家され動機の1つだったそうです」。

優しい母の声に反して、親鸞の心には、母の死と、強いものが弱い命を奪うという残酷な話しとが重なり、心の奥底に刻み込まれていたのです。

哀れむべきは、食べられる魚ではなく、弱い他の命を食べてしか生命をならえるすべしか持ち得ない自分。その自分の存在と釈尊は悲しみが重なります。

その悲しむべき私が、無条件に救われていく仏法が、いま私の上に念仏として、お経の言葉として、また袈裟や法具などのお荘厳として整っている。「南無阿弥陀仏…」。親鸞は念仏を称えながら袈裟を押し頂いた。如来の慈しみを袈裟の上に拝したのです。

聖人は、袈裟を付けたまま座に着き、はばかりことなく、魚や鳥の肉を食べ始められました。しばらくして鱒が御前に運ばれてきた時のことです。他の出家者と異なり、袈裟を付けたまま、はばかりことなく口に運んでいる聖人の姿を目にとめ、異様に感じられた、のちに最明寺の禅門となる9才の開寿殿（北条時頼）が、聖人の耳元におよび小声でお尋ねになりました。開寿殿「あの出家者たちは、あのよう魚を食べつときは袈裟を脱いで食べておられます。善信さま（親鸞）、何かお考えがあつてお袈裟を御着用してお食べになっておられるのではないですか。その訳を教えてください」

聖人「これは開寿殿さま、真意などありません。あの出家者たちは、つねにこうした座に着かれていますので、魚や鳥の肉などを食べる時は袈裟を脱ぐべしという作法が身に付いているのでございます。この私は、このようなご馳走は今までに食べたことがなかったので、うっかり袈裟を脱ぐことを忘れていました」

開寿殿「そのお答は偽りでございましょう。きっと深いお考えがあるのですが、この私がまだ幼稚なので、その真意を伝えても理解されないと思っているのではないですか。どうかその真意を教えてください」。

聖人「真意などありません。ご馳走を目の前にしてボーとしておりました」

またある日のこと、その日も宴席が催され、開寿殿は、また過日の如く聖人の元に来て、その訳を尋ねられました。聖人は過日のように「また忘れました」と答弁すると、開寿殿は引き下がることなく、さらにその真意を聞いてきたのです。

開寿殿「そうたびたびお忘れになるはずはありません。きっと私が幼少でその真意は理解できないとお思いで、お心の内をお述べにならないのでしょうか。どうかそこをまげて本当のところを教えてください」。うっすらと涙を浮かべた少年に、隠し通すことができないと思われた聖人は、心の内を打ち明けました。

「私は生まれがたい人に生まれ僧となりました。この私が釈尊のお戒めになられた肉味を食べ、舌つづみを打つなどということは滅相もないことです。しかし今は末法濁世の時、戒律を保つてさとりを開く道は閉ざされ、戒律を保つ者もなく、その戒律を破るという思いを持つ者さえもいません。私は、姿形こそ僧侶ですが、やっていることは皆さんと同じです。ただいまもこのように魚や鳥の肉を食べております。どうせ食べるならば、食べられる魚を仏道に導こうと思うのですが、私は如来の仏弟子と名乗っていますが、その姿に反して心は貪りと愚痴に覆われております。どうしてその私が、この魚を導くことができるでしょうか。

しかしこの袈裟は、過去・現在・未来にわたる仏たちのお覚りを見護り、そのお覚りを開いた仏の肌に直接触れてきた希少な服です。私にはこの袈裟と如来のこの私を見護って下さる慈しみとが重なります。食べられる魚も如来の救いのめあて、食べる私も如来の救いのめあて、魚も私もこのまま救われていくしか救われようのない存在、その両者を救って下さる阿弥陀仏の功德を常々この袈裟の上に仰いでおります。いまも如来の功德をこの袈裟に感じながら、袈裟をつけて食べております。人が聞いたら愚かなこととおかしく思われることと思いますが、真意はそんなところでは。南無阿弥陀仏…」。

聖人の心の内を聞かれた開寿殿は、幼少の身ながら、聖人のその言葉に感動し、「得難いみ教えを聞かせて頂きました」と、宴席も仏と知遇する道場となることを喜ばれ、深く聖人の言葉を心に刻まれました。

注) 当時のおおまかな出来ごと

- 1224 親鸞聖人（1173～1262）が浄土真宗を開く
- 1243 道元が宗道宗を開く
- 1248 道元が時頼の待つ鎌倉で半年暮らす。
- 1252 鎌倉大仏建立
- 1253 日蓮が日蓮宗を開く
- 1257 時頼（31歳）が西明寺入道として諸国行脚